ホワイトボード

ピンプキン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ホワイトボード

【Ｎコード】
Ｎ８０１３Ｒ

【作者名】
ピンプキン

【あらすじ】
７年前、東京に引っ越してしまった親友の大友祐介。昔、交わした約束「バンドを組もう」も忘れ、ただただ平凡な生活を送っていた尾崎誠。
そんな、尾崎の元へ中３の春、祐介…ユウちゃんが帰ってきた！
しかし、帰ってきたユウちゃんは『声』を失っていて…。
そこから始まる、バンドストーリー！！

声を失った少年とやる気ゼロの恋男

―7年前―

「ユウちゃん、ユウちゃんは将来、歌手になるの？」

「うん！歌大好きだし、歌手になるのが夢なんだ！」

ユウちゃん…大友祐介（おおともゆうすけ）は歌が大好きでいっつもなにかを歌ってた。

「じゃあ、僕がユウちゃんの隣でギターを弾くよ」

「本当！？じゃあ、将来はいっしょにバンド組もうよ！！」

そん時はバンドっていうものもよく分からず、とりあえず「うん！」って言ったんだっけ。

だけど、夢が実現することはもう、ないだろう。

ユウちゃんは小学3年生になるとき、東京に引っ越してしまったんだ。

幼いときの夢なんてそんなもん。今、ユウちゃんがどうしてるかは知らないけど多分、約束のことなんて忘れてる。そう言う僕だってなにもしてないんだから。

ただ、生活に流されるだけ。それだけで時間は進んでいく―。

春。僕は今日から中学3年生だ。大人達は「受験生なんだから」とか勝手なことばかり言ってくれるが、どうだっていい。なにも、する気ないから。

学校につくと新しいクラス表が貼ってある。

尾崎誠(おざきまこと)…尾崎誠…

僕は、自分の名前を探す。

「あ！あった！」

どうやら、僕は3年2組のようだ。続けてもう一つ名前を探す。

春野咲(はるのさき)…

春野は尾崎が小学4年生の時から好意をもっている女子。小学生のときはずっと同じクラスだったが、中学校に入ってからは中1のときは同じクラスだったものの中2では違うクラスだった。

春野も2組！やった！！

誰にもバレないよう内心で喜んでいると、同じクラスの名前の中に気になる名前を見つけた。

大友祐介……？

尾崎の学年には全部で153人いる。だから、5クラスあるわけな

のだが。確かに学年全員の名前は知らないけど…。同姓同名？いや、さすがにないだろ。

だとしたら、まさかユウちゃんが……？

考えてたって仕方ない。

尾崎はとりあえず、教室に向かうことにした。

ガラッ

教室にはまだ、１０人程しかいない。でも、その中には春野がいた。

一瞬、目が合う。しかし、尾崎はすぐに背けてしまう。

尾崎は春野と話したことがほとんど…いや、絶滅的にないといえるほどにない。同じクラスになったことは何回もあるのにいざとなると恥ずかしくて喋れなくなってしまうのだ。

まったく、中３になっても恥ずかしいなんて我ながら小心者だな。

などと、考えながら席につく。と、そのタイミングと同時に「グァッシャーン」というとてつもない音でドアを開けたバカ。いや、『バカ』と人のことを言えるほど自分が頭がいいとは思っていないがこいつよりはましな自信はある。

速攻で近づいてきたバカはおそらく自身の最大の音量かと思われる声で「おはよう」と挨拶。

こういうときにはいつもこいつの口にガムテープを貼ってやろうかと思う。あっ、やっぱり接着剤か。

「うるせーよ。敦志(あつし)。木工ボンドで口塞ぐぞ」

「それよりもさ～さっき、すげーもん見たんだよ～」

どんな返しだ。少しはうろたえろ。そんなに僕の言い方、威圧感なかった？

「東京から来た、このクラスに来るっていう噂の転校生がベンツに乗ってきたんだよ」

「なにぃ！？」

声を失った少年とやる気ゼロの恋男

「東京から来た、このクラスに来るっていう噂の転校生がベンツに乗ってきたんだよ」

「なにぃ！？」

「…ちょっと、どいてっ！」

敦志の横を通り過ぎ、凄いスピードで教室を出て行く尾崎。

間違いない。ユウちゃんだ…！

階段を駆け下り、職員室に向かう。職員室をのぞいてみると、やはり、ユウちゃんと思われる少年がいる。その隣には見覚えのあるおばさん。

やっぱり、ユウちゃんだ。

肝心のユウちゃんの方は背も伸び、ちゃんとは判断できないが、おばさんの方は間違いなく昔見たユウちゃんのお母さんだ。

そんなことを考えていると、教頭先生との会話が聞こえてきた。

「聞いてませんよ！喋ることが出来ないなんて！！」

……はぁ！？

なに言ってんだ？わけわかんね。

先生の言葉におばさんが答える。

「いえ、本人が日常生活には支障はないと言っているので」

「支障あるでしょう！！喋べれないんですよ！普通は障害者のクラスに入れる準備とかを…」

『だから、いらねーつーの。黙れハゲチャビン』

は？

尾崎は唖然とした。ユウちゃんが手に持っていたのは、ホワイトボードだったからだ。

えぇっ！！

ホワイトボード！？

ありえねぇ…普通、紙とかだろ。ホワイトボードってどんなチョイスだよ。いきなり、喧嘩売りやがったし！ユウちゃん、ヤンキー！？

「てめぇ…こんなことして、楽しい学校生活送れると思うなよ…」

先輩ヤンキーの挨拶か！！教頭のくせしてなに言ってやがる、あのハゲチャビン！！

「とにかく！息子は普通のクラスでお願いします。ハゲチャビン！！」

おばさんまで！？

これは、楽しい学校生活送れそうにはないわ。

「…分っかりましたぁ……」

思いっきり強く握った拳をこらえ、答える。ハゲチャビ……いや、ハゲ散らかしたおっさん。

明らかに人格変わってるよね！？

なんて男だ…ユウちゃん。恐ろし過ぎる。なにあれ、本格的にヤンキーじゃん。

数年前はあんなじゃなかったのに。

と、とりあえず、教室に戻ろ。あーこわいこわい。

『ところで』

『尾崎誠ってこの学校だよな？』

「あぁ？あのポンコツか？それがどうした？」

『いや、別に』

教室に戻ってみると、すでにほとんど揃っているようだった。

男子達はすでに敦志の周りに集まりなにか盛り上がっている様子。

そもそも、敦志はなぜか男子のグループではリーダー格になる。

全く、見る目がないなぁ。

と、席に座ってみて、気づいた。

出席番号順、窓際の一番後ろという最高のポジション。

しかし…、『大友祐介』って前の席じゃん！！

おおとも→おざき

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8013r/

ホワイトボード

2011年4月1日17時40分発行